【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2411E

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)・2)・3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。2)被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、米沢玲（研究員）、小山田智寛（研究員）、阿部朋絵（研究補佐員）、増田政史（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○全所的な文化財情報の発信：4 半期ごとにアーカイブズWG協議会を開催した（5 月 11 日、6 月 14 日、9 月 25 日、31 年 3 月 19 日）。継続的に情報発信を行う基盤構築を行った。

○実践女子大学香雪記念資料館・京都工芸繊維大学美術工芸資料館「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」に協力し、所蔵資料である田中一松資料をまとまった形で初公開した。パンフレットを作成し、京都工芸繊維大学でのシンポジウムにおいて口頭発表を行い（7 月 7 日）、文化財情報資料部研究会でも発表を行った（31 年 1 月 29 日）。

○美術資料のデータ化と公開：栃木県佐野市立吉澤記念美術館所蔵　伊藤若冲筆「菜蟲譜」、薬師寺所蔵「国宝　吉祥天像」に関するデジタルコンテンツ等を作成し、所内公開を行った。

○所蔵図書・雑誌資料の書誌情報の標準化と所蔵資料管理の改良：約 30 万件の蔵書について標準的な情報化と効率的な情報公開、適切な蔵書管理のため、図書館システムを導入した。

○明治・大正期刊行の雑誌類等資料のデジタル化推進：当研究所及び東京美術倶楽部所蔵の『売立目録』について、データ入力と収載内容のテキストと画像が検索できるシステム改良を行い、所内公開に向けての準備を行った。

○資料閲覧室の運営・管理

・資料受け入れ数：和漢書 3,833 件、洋書 70 件、展覧会図録・報告書等 7,092 件、雑誌 1,647 件（合計 12,642 件）

・閲覧室利用状況：公開日総数 137 日・年間利用者合計 1,070 人

「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」パンフレット

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国際的なオープンアクセス需要への対応のため、当研究所の活動と研究成果を広く周知することを継続的に行った。また実践女子大学・京都工芸繊維大学共催で行った展覧会に協力し、所蔵資料を初公開することができた。②独創性においては、当研究所が有する専門性・独自性の高い文化財情報の公開を念頭におき、『売立目録』のデジタル検索システムの所内公開の準備などを進めた。③発展性においては、国内外の関係機関と連携して、国内外に情報発信するための取り組みを積極的に行い、今後の活動の基盤を強化した。④継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業を年間通じて順調に進めた。あわせて、高い利便性と安定した資料の保管の双方に配慮しつつ、資料閲覧室としての公共性と高い専門性を保持した運営を行い、週 3 回、一般利用者への所蔵資料の提供を行った。以上により、所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」への協力:研究発表 2 件（ア） ・美術資料のデジタルコンテンツ制作と公開　2 件（イ、ウ）	定量評価 −

ア　江村知子「田中一松資料について」（「記録された日本美術史−相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート展」シンポジウム、7 月 7 日、京都工芸繊維大学）ほか 1 件、

イ　栃木県佐野市立吉澤記念美術館所蔵・伊藤若冲筆「菜蟲譜」、ウ　薬師寺所蔵「国宝　吉祥天像」（31 年 3 月）

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、文化財研究の専門機関として研究成果の情報発信とデータベース化にあたって、汎用性・利便性を視野に入れつつ公開を推進し、あわせて資料閲覧室としての公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。31 年度以降も当研究所が行う文化財の調査研究とその成果を集約しつつ、データベースの継続的拡充を行い、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実を推進する。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2411F

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○森本晋（企画調整部長）、高田祐一（文化財情報研究室研究員）	

【年度実績と成果】

・文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補完の各データベースに関して、データの入力・更新を行うとともに、公開データベースの更新を行った。

・データベースのデータ件数は 30 年度末で以下のとおり、順調に増加している。ただし（　）内は 29 年度末の値。(単位:件)

木簡　53,933 件(166,658)【データベースの構造をリニューアル】
抄録　108,279 件(103,028)
写真　798,976 件(729,474)
遺跡　487,544 件(483,842)
航空写真　1,394,006 件(1,393,190)
図面画像　376,991 件(346,672)
論文補完　99,367 件(95,967)

遺跡報告総覧説明会

・埋蔵文化財の発掘調査報告書の全文検索データベース「全国遺跡報告総覧」に関して、関係機関との協議を計 9 回行ったほか、全国各地で説明会を 5 回開催した。

年度計画評価	A

【評定理由】

①適時性においては、最新のデータを提供して充実を図っている。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させているとともに、データベースの機能強化を実現している。④継続性においては、大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。これらより、内容豊かなデータベースとして著しく発展していることから、順調に事業が推移していると判断し、全体の評定をＡとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・文化財に関するデータベースの公開件数 24 件	(実績値) 公開データベースの件数　24 件 (参考値) 公開データベースのデータ件数　1,316,283 件 データベースへのアクセス件数　12,870,940 件 内全国遺跡報告総覧データ件数　48,687 件 アクセス件数　11,175,466 件 論文発表　5 件（ア）　口頭発表　4 件（イ）	A

（ア）論文　高田祐一「全国遺跡報告総覧における学術情報流通と活用の取り組み」他 4 件
（イ）研究発表　森本晋「編年時間参照系モデルを活用した編年定義間の不整合箇所抽出法について」他 3 件

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	文化財情報に関する基礎的な研究を積み重ねつつ、継続性が重要なデータベースの充実を着実に進めている。他機関と協力して進める大規模データベースである全国遺跡報告総覧は、頻出用語表示機能などのデータ解析機能を付加し、データのダウンロードも 141 万件以上に達するなど、中期目標を超える成果を継続して達成しており、今後の発展も引き続き期待される。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2413F

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。(連携推進課)
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○津田保行（連携推進課長）、渡勝弥（課長補佐）、伊藤久美（事務補佐員）ほか	

【年度実績と成果】

・資料の収集・整理・保管・提供
新庁舎の完成に伴い、9 月 3 日から 10 月 14 日までの限られた期間で、図書約 25 万冊、雑誌約 8 万冊を仮設庁舎から新庁舎へ計画的かつ効率的に移動した。

・新庁舎の完成により書庫の収蔵冊数が約 47 万冊となり、旧庁舎の約 3 倍となる収蔵設備を充実した。また、閲覧室に加えて、閲覧室前の通路部分にも一般利用者の閲覧スペースを設けることで利用サービスの充実を行った。

・利用者サービス
利用者の利便性の向上を図るため、閲覧希望者には事前に閲覧希望資料をメールまたはファックスにて送付してもらうことにより、待ち時間の短縮を図った。
奈文研が組織運用する平城宮跡解説ボランティアの方々を対象に閲覧室の利用についての説明会を実施し、開かれた閲覧室と閲覧室の利用促進のアピールをした。

購入図書　804 冊
寄贈図書　8,052 冊
雑誌　2,953 冊

一般利用者　295 人
利用冊数　2,609 冊
来館者複写件数　1,011 件

遠隔利用：複写受付件数　346 件
貸借貸出冊数　65 冊

新庁舎の閲覧室

年度計画評価	A

【評定理由】
下記各観点から評価を行った。①適時性において、図書の移動を契機に書庫の鍵をシリンダー錠から職員個人のカードキーに移行したことにより、研究員が図書資料室に鍵を取りにくる必要がなくなったため、地下書庫に図書自動貸出機、複写機、閲覧机を配置することで資料の閲覧・出納を可能とし、研究員の調査・研究の利便性の向上を図った。また、一般利用者のために閲覧室前の通路部分にも閲覧スペースを設けて利用サービスの充実を行った。②発展性において、図書資料の収蔵スペースを旧庁舎の約 3 倍に充実させた。また、従来は図書自動貸出機で返却処理をしていたが、図書自動貸出機を地下 2 階に移動したため、返却処理は図書資料室でも行うこととし、夜間の返却用に図書資料室外に返却用ブックトラックを配置するなど、図書の移動を契機に多様な対応を行った。③効率性において、一般利用者の閲覧希望資料を事前に連絡制を導入することにより、待ち時間の短縮を行った。④継続性において、従来の継続的な業務を滞りなく行った。以上の観点から本事業は順調に推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	(参考値) 資料閲覧室・図書資料室の開室日数　219 日 資料閲覧室・図書資料室の利用者数　295 人 文化財に関する資料・図書等の総件数　468,084 件	—

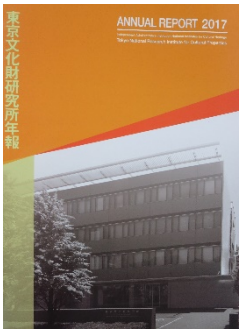
中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	長年の慢性的な書庫狭隘化が解消されたことにより、計画的に多種・多様な資料の収集計画を立案することが可能となった。また、書庫面積の拡大により棚数が増加したため、長期的に大規模な図書移動がないように各書架に余裕を持たせた資料配置を行ったことにより、研究員が書庫を利用するうえでの長期的な利便性を向上した。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2421E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』　・『東京文化財研究所概要』　・『東文研ニュース』　・『美術研究』(年３冊) ・『日本美術年鑑』　・『無形文化遺産研究報告』　・『無形民俗文化財研究協議会報告書』　・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
東京文化財研究所	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】**○齊藤孝正（所長）	

【年度実績と成果】

・『東京文化財研究所年報』2017 年度版
・『東京文化財研究所概要』2018 年度版
・『東文研ニュース』年３回（67～69 号）
・『美術研究』(425 号)（6 月）
・『美術研究』(426 号)（12 月）
・『美術研究』(427 号)（31 年３月）
・『平成 29 年版　日本美術年鑑』(31 年３月)
・『無形文化遺産研究報告』第 13 号（31 年３月）
・『第 13 回無形民俗文化財研究協議会報告書』(31 年３月)
・『保存科学』58 号（31 年３月）



『東京文化財研究所年報』

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行なった。①適時性においては、『無形文化遺産部研究報告』では、文化財等保存技術はその多くで伝承の維持が危ぶまれており、実態調査は喫緊の課題といえるが、伝統芸能で使われる楽器に関連する保存技術をまとめて報告された事例は少なく、研究プロジェクトの研究成果を速やかに発表することができた。②独創性においては、『美術研究』426 号の高田知仁論文で、誌上 58 年ぶりとなる東南アジアの美術を取り上げ、タイ近世近代の螺鈿装飾と王権との密接な関係・変化について実証的検討を行った点を高く評価した。③発展性においては、『美術研究』425～427 号に継続的に近代画家らの書簡を翻刻解題報告することで、当時の画壇の人的交流や関係の全体像を明らかにする研究への発展が期待される。④効率性においては、『保存科学』刊行では、30 年度末の発行を実現するめに、査読や英文校正等を含む編集作業の効率を向上させた。⑤定量評価においては、所期の予定通り 12 点の定期刊行物を刊行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	
定性評価	B	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・定期刊行物等の刊行件数　12 件	(実績値) 定期刊行物等の刊行件数　12 件（以下のとおり） 『東京文化財研究所年報』2017 年度版　刊行部数 400 部 『東京文化財研究所概要』2018 年度版　刊行部数 2,700 部 『東文研ニュース』67～69 号　刊行部数各 1,600 部 『平成 29 年版　日本美術年鑑』刊行部数・配布部数 600 部 『美術研究』425 号～427 号　刊行部数各 400 部、配布部数各 380 部 『無形文化遺産研究報告』第 13 号　発行部数 600 部 『第 13 回無形民俗文化財研究協議会報告書』　発行部数 700 部 『保存科学』58 号　発行部数 650 部、配布部数 500 部	B

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	中期計画３年目となる 30 年度も所期の計画通り、各研究プロジェクトの研究成果を反映させた定期刊行物を刊行することができた。31 年度以降も、学術誌としての一定の水準を保ちながら、また当研究所の事業内容を一般に広報する上でも有益な内容の報告書となるよう今後とも努める予定である。

【書式Ｃ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2421F

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行　・『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 3)ウェブサイトの充実　・学術情報リポジトリ・なぶんけんブログ（探検!奈文研、コラム作寶樓等）
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○津田保行（連携推進課長）、渡勝弥（連携推進課課長補佐）溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、ほか	

【年度実績と成果】

◆定期刊行物の刊行
- 奈良文化財研究所概要 2018　30 年 6 月刊行、3,000 部
- 奈良文化財研究所紀要 2018　30 年 6 月刊行、3,000 部
- 奈文研ニュース「No.69」30 年 6 月「No.70」30 年 9 月「No.71」30 年 12 月「No.72」31 年 3 月
- 埋蔵文化財ニュース　31 年 3 月「No.174」「No.175」「No.176」「No.177」

◆現地説明会
- 6 月 17 日平城宮東院地区の発掘調査(平城第 595 次）現地説明会　於奈良市法華寺町他(参加者　813 人)
- 9 月 15 日藤原宮大極殿院の発掘調査(飛鳥藤原第 195 次)現地説明会　於橿原市高殿（参加者　694 人）
- 12 月 15 日平城宮東区朝堂院の発掘調査(平城第 602 次）現地説明会　於奈良市法華寺町他(参加者 569 人)

◆講演会
- 6 月 16 日第 122 回公開講演会　講演者：山本、佐藤、福嶋（参加者 224 人）
- 9 月 22 日　東院庭園庭の宴（参加者　138 人）
- 10 月 13 日　第 10 回東京講演会タイトル「藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く」
  講演者：渡辺・海野・大澤・今井・神野・玉田（参加者　530 人）
- 11 月 10 日第 123 回公開講演会　講演者：所長、高田、山藤（参加者　163 人）

奈文研ニュース

◆シンポジウム
- 10 月 23 日　第 1 回 報告書データベース作成に関する説明会　11 月 22 日　第 2 回　12 月 20 日　第 3 回　31 年 1 月 22 日　第 4 回　31 年 2 月 22 日　第 5 回
- 11 月 18 日　文化的景観研究集会（第 10 回）（参加者 90 人）
- 11 月 27 日　保存科学研究集会 2018「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」（参加者 116 人）
- 12 月 7 日～8 日　第 22 回古代官衙・集落研究集会「官衙・集落と大甕」（参加者 119 人）
- 12 月 21 日　遺跡整備・活用研究集会(参加者 129 人）
- 31 年 2 月 2 日～3 日　第 19 回古代瓦研究会シンポジウム(参加者 203 人）

◆体験型イベント
- 8 月 7 日～8 日「つくろう!!ミニチュア玉枕」（飛鳥資料館）阿武山古墳から出土した玉枕のミニチュアをビーズで作るイベント（参加者 103 人）
- 8 月 21 日～22 日「奈良の都の木簡に会いに行こう!2018」子供達が発掘現場から持ち帰った木簡を含む土の洗浄・選別作業や木簡の解読等の体験を行った。（参加者 49 人）（日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」採択事業）
- 11 月 9 日「古代の曲物迫る」（飛鳥資料館）曲物を桜の樹皮で綴じる「樺綴じ」を応用した栞づくりを、曲物の材料をつかって体験を行った。（参加者 17 人）

◆ウェブサイトの充実
- ウェブサイト全体のアクセス件数は 13,931,633 件（29 年度 10,887,187 件）を達成した。
- 「全国遺跡報告総覧」の登録件数が 3 万件を超え、公開当初の倍となり、発行機関数は 530 機関で公開当初の 1.6 倍となった。8 月にはモバイル端末向けの PDF を公開し、また、12 月には遺跡の所在地、種別、時代等で報告書が検索できるサービスを公開した。
- 奈文研ブログ「探検！奈文研」は、 No183～No200　「コラム作寶樓」月 2 回更新

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、調査研究の成果を適時に刊行するとともに、現地説明会開催、ウェブ公開いずれにおいても即時的に情報を発信した。②独創性においては、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性においては、個々のデータベース登録数も増え、多様なブログ、コラム等を更新することによりＨＰの内容を一層充実させた。また、当研究所の調査研究の成果を多元的に発信するために体験イベントを実施した。④継続性においては、定期刊行物、講演会、ウェブ公開いずれにおいても従来から継続的に実施している上、データベースは随時、データを増加しており、アクセス数も上昇しているため、恒久的な提供と利用が認められる。⑤定量的評価の観点について、刊行数においては目標通りに実施することができ、公開講演会等においては目標を上回る回数を実施することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	A	A	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 定期刊行物等の刊行件数 10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 10 回	(実績値) (1) 定期刊行物等の刊行件数　10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数　20 回	(1) B (2) A

中期計画評価	A

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	目標を上回る回数の公開講演会や現地説明会等を実施し、調査成果を精力的かつ多元的に発信している。また、全国遺跡報告総覧などウェブサイトの利用率は飛躍的に上昇している。 今後も公開講演会、現地説明会、ウェブサイトの充実等を通じて調査研究の成果をさらに発信していきたい。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2422E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	平成 30 年度オープンレクチャー（調査･研究成果の公開）	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小野真由美（主任研究員）	

【年度実績と成果】

○10 月 26 日、27 日の 2 日間にわたり、専門家はもとよりひろく一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。

○当研究所より 2 人、外部より 2 人の講演を行った。それぞれの講演テーマは次の通りである。
・小山田智寛（文化財情報資料部研究員）「文化財データベースの作成とその意義について」
・水野裕史（筑波大学助教）「雪村周継と臨済宗幻住派―大雄山法雲寺を起点に―」
・山梨絵美子（副所長）「裸婦に表わされた地域性―フジタ・常玉・陳澄波を例に」
・呉孟晋（京都国立博物館主任研究員）「伝統を現代につなぐ：斉白石が描いた花鳥のかたち」

講演会の様子

○外部からの聴講者は 10 月 26 日が 66 人、27 日が 68 人の参加を得た。

年度計画評価	B

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、両日あわせて 134 人の参加者を見、専門家以外の一般参加者が多かった。参加者からのアンケート結果では、10 月 26 日の 56 人の回答者数のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ 76.8%、10 月 27 日の 54 人の回答者のうち「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ 94.5%の回答を得ることができ、時宜に適った講演テーマにて実施できた。②独創性においては、「かたちからの道、かたちへの道」という大テーマのもと、日本美術の多様な作品についてこれまで未発表であった研究成果を公開できた。③発展性においては、日本美術について多様な面から研究成果を一般に公開でき、今後の専門論文発表の礎となった。④継続性においては、「古典の日」に合わせ、さらに台東区の「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の一環としての協力を欠かさずに続けて開催している。また、定量評価においては、年 1 回開催の目標を達成し、アンケートにより参加者の高い満足度を得た。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・講演会の開催回数 1 回	（実績値） 1 回	B

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、29 年度に続き今中期計画 3 年目にあたるプロジェクト事業を計画通り達成できた。31 年度も同様に「かたちからの道、かたちへの道」をテーマとして、2 日間、各日 2 人の形態で開催する予定である。

【書式Ｃ】　施設名 東京文化財研究所　処理番号 2423E

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 3)ウェブサイトの充実 ・東文研総合検索システム　・東京文化財研究所刊行物一覧　・学術情報リポジトリ
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、三島大暉（アソシエイトフェロー）、逢坂裕紀子（研究補佐員）、安岡みのり（研究補佐員）、丸山礼（研究補佐員）	

【年度実績と成果】

○調査研究成果の発信

・2 件のウェブデータベース（「明治大正期書画家番付データベース」、「書画家人名データベース（明治大正期書画家番付による）」）を新規に公開した。また「総合検索」にて公開されている所蔵図書や文化財関係文献等の各種データベースに対するデータ追加を毎月末に実施するとともに、機能改善を適宜実施した。さらに、東京文化財研究所ウェブサイトの更新、SNS による情報発信を適宜実施した。

・刊行物一覧について、全文検索や並べ替え、当該刊行物の PDF ファイルへのリンク機能を追加し、利便性を高めた。

○研究成果発信のための情報セキュリティの強化

・サイバー攻撃を防ぐファイアウォール、及び所外へのアクセスを制御するプロキシの機能を統合したセキュリティシステム、ネットワーク機器の動作記録（ログ）を一か所で管理するログサーバーを導入、無線 LAN アクセスポイントを更新した。

・ネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しセキュリティ水準の維持向上に努めた。

・当研究所職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に研修を開催した（9 月 4 日、31 年 3 月 12 日）。

○その他

・29 年度に引き続き、文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携し、データベース管理システム Oracle による所内データベースをカスタマイズ、利便性を向上させた。また、学会や専門家のユーザー会での発表により、データベース構築や運用、データベース公開の効果に関連した成果を公表した。

明治大正期書画家番付データベース

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースの新規公開、データ追加は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえるもので、時宜に適ったものである。②独創性においては、無料のデータベースエンジン、ウェブコンテンツを統合的に管理する content management system(CMS)を利用、所内で独自開発した公開データベースは学会やユーザー会でも高く評価された。③発展性においては、横断検索が可能で、画像、テキストのいずれも扱えるデータベースを構築、今後のデータベースの多様化にも対応した。④効率性においては、情報システムへの理解を深める所内向け研修など、効果的に活動を所内外に伝達できた。⑤継続性においては、ウェブサイト更新による情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に実施した。⑥定量評価においては、目標値の 150%超のデータベースを公開できた。よって、初期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	A	B

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
・データベースの公開件数　18 件	（実績値）データベースの公開件数　28 件 （参考値） ・データベースのデータ件数 1,271,388 件 ・データベース等へのアクセス件数 3,096,569 件 （うち海外からのアクセス件数割合 約 30%） ・学会発表件数　6 件（ア）　論文件数　1 件（イ）	A

ア 小山田智寛、二神葉子、福永八朗、三島大暉、田所泰「刊行物および Web 公開データベースを含む東京文化財研究所の情報管理システム」（デジタルアーカイブ学会第 3 回研究大会、京都大学、31 年 3 月 15、16 日）ほか 5 件

イ 小山田智寛、二神葉子、三島大暉「持続可能な文化財情報データベースの構築と運用について」（『公開シンポジウム「人文科学とデータベース」2019　発表論文集』、31 年 3 月 2 日刊行）

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。
評定理由及び今後の見通し	30 年度は、上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の計画を上回ることができた。31 年度以降も、運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携し、効率的に調査研究を実施する。また、情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブサイトを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、国内外での事例調査を実施し、文化財情報データベースをさらに拡充する。

【書式Ｃ】　施設名 奈良文化財研究所　処理番号 2431F

中期計画の項目	(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 1)特別展・企画展
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○加藤真二（企画調整部展示企画室長）、石橋茂登（飛鳥資料館学芸室長）ほか	

【年度実績と成果】

○平城宮跡資料館　開館日数 307 日　入館者数 90,558 人
・夏期企画展「夏のこども展示　たいけん！なぶんけん」（7 月 21 日～9 月 2 日）開催。入館者数 9,205 人
・秋期特別展「地下の正倉院展 - 荷札木簡をひもとく - 」（10 月 13 日～11 月 25 日）開催。入館者数 15,853 人
・新春ミニ展示「平城京の亥」（31 年 1 月 4 日～１月 27 日）開催。入館者数 4,576 人
・冬期企画展「発掘された平城 2017・2018」（31 年 2 月 2 日～3 月 31 日）開催。入館者数：11,725 人
・常設展展示物・施設のメンテナンス　専門業者により 10 月 29 日に実施、ボランティアガイド・外部質問、取材、学校団体対応（5 件/週）。展示物等の貸借業務（16 件）

○飛鳥資料館　開館日数 304 日　入館者数 29,276 人
・春期特別展「あすかの原風景」（4 月 27 日～7 月 1 日）開催。入館者数 8,816 人　5 月 25 日ウォークイベント開催。
・夏期企画展「第 9 回写真コンテスト「飛鳥のいきもの」」（7 月 27 日～9 月 2 日）開催。入館者数 2,428 人
・秋期特別展「よみがえる飛鳥の工房－日韓の技術交流を探る」（10 月 5 日～12 月 2 日）開催。入館者数 7,492 人 11 月 9 日曲物イベント開催。
・冬期企画展「飛鳥の考古学 2018」（31 年 1 月 25 日～3 月 17 日）開催。入館者数 3,117 人

平城宮跡資料館ギャラリートーク

飛鳥資料館曲物イベント

○藤原宮跡資料室
常設展示に加え、①山田寺の調査出土遺物、②山田道の調査出土器・古墳時代の弓・木製品等の写真パネル、③飛鳥寺北方の調査出土軒瓦・文字瓦・鴟尾等を速報展示。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。

①適時性においては、新庁舎も完成し奈文研の関心が高まっている中、その業務を紹介する平城の夏期企画展を実施できた。②独創性においては、秋期特別展において、木簡という、奈良文化財研究所ならではの素材をもとに、全国各地からの来館者の地元と平城宮・京とのかかわりを知ってもらうという、広がりをもった展示を行なうことができた。③発展性においては、各展覧会とも、共用のパンフレットなど、3 月に開館した平城宮いざない館第４展示室とリンクさせる企画を実施することができた。将来的に両者を利用した企画展・特別展を開催す基礎を構築できた。飛鳥資料館では春期展における地籍図の調査と展示やウォークイベントの開催を通じた地元との連携、秋期展での曲物職人とコラボレーションした製作イベントの開催など、従来の展示・講演会と異なる展開を試みていることが高く評価できる。④継続性においては、毎年行っている展覧会であっても、内容を変えつつ、継続的に実施するとともに、ギャラリートークなども充実させている。このため、平城の秋期特別展については、29 年度よりも 1,012 人多い来館者があった。定量評価について、平城宮跡資料館においては特別展・企画展を年間 4 件開催することができ、目標以上に実施出来た。

以上から、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
(1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数　4 件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展等開催件数　4 件	(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数　4 件 (2) 飛鳥資料館特別展・企画展等開催件数　4 件 (参考値) 平城宮跡資料館　入館者数：90,558 人　開館日数：307 日 飛鳥資料館　入館者数：29,276 人　開館日数：304 日 藤原宮跡資料室入館者数：8,270 人、開館日数：357 日 図録等刊行実績：平城宮跡資料館: 3 件（ア～ウ）、飛鳥資料館: 3 件（エ～カ）	(1) B (2) B

ア『たいけん！　なぶんけんノート』（T210 ㎜×Y100 ㎜判フルカラー24 ページ　7 月 21 日発行）
イ『地下の正倉院展―荷札木簡をひもとく―』（A4 判フルカラー16 ページ　10 月 13 日発行）
ウ『発掘された平城 2017・2018』（A4 判フルカラー８ページ　31 年 2 月 2 日発行）
エ『あすかの原風景』（定形外オールカラー72 ページ　4 月 27 日発行）
オ『よみがえる飛鳥の工房－日韓の技術交流を探る』（A4 オールカラー42 ページ　10 月 5 日発行）
カ『飛鳥の考古学 2018』（Ａ４オールカラー20 ページ　31 年 1 月 25 日発行）

中期計画評価	B

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。
評定理由及び今後の見通し	平城宮跡資料館、飛鳥資料館ともに４回の展覧会を開催するなど、順調に目標値を達成している。来館者のさらなる理解向上に向け、プロジェクトの実施を図りたい。

【書式Ｃ】　施設名　奈良文化財研究所　処理番号　2432F

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 2)定期的に勉強会や研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	**【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】** ○津田保行（連携推進課長）、溝端靖秀（連携推進課課長補佐）、岩井靖子（連携推進課事務補佐員）、林尚代（連携推進課事務補佐員）、京牟礼薫（連携推進課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

○解説ボランティア研修等

解説ボランティアの育成に資するため、平城宮跡資料館及び平城宮跡歴史公園平城宮いざない館（受託授業）における特別展、企画展にかかる解説ボランティアに向けての展示解説研修の実施、発掘調査の現地説明会、及びボランティア勉強会を実施した。

・平城宮跡歴史公園平城宮いざない館展示研修 4 月 1 日から 16 日の毎日（計：土、日を除く 11 日間）及び 21 日
・平城宮跡資料館夏期こども展示解説研修 7 月 20 日・23 日
・平城宮跡資料館「地下の正倉院展」解説研修 10 月 12 日・15 日（Ⅰ期）、10 月 29 日（Ⅱ期）、11 月 12 日（Ⅲ期）
・解説ボランティア向けの発掘調査の現地説明会（平城宮跡東院地区） 6 月 15 日（平城宮東院地区）、12 月 14 日 （平城宮東区朝堂院）
・解説ボランティア勉強会 8 月 18 日・20 日、9 月 15 日・18 日、12 月 15 日・17 日（毎月同内容で 2 回開催、平城宮跡に関する内容等について）

○解説ボランティアに関する会議

・平城宮跡解説ボランティア懇談会の開催（研究部と事務部が一体となったボランティア活動を検討する会議、毎月 1 回開催）
・平城宮跡解説ボランティア連絡会議の開催（解説ボランティア班長と奈文研職員によるボランティア活動の確認、活性化、改善等を検討するための会議、毎月 1 回開催）

連絡会議については、平城宮跡資料館駐輪場の整備、定点ガイド配置者の不足解消、次年度勉強会の希望テーマの意見集約など、解説ボランティアからの意見を取り入れ、運用改善を行った。また、文化庁や平城宮跡歴史公園を運用する国営飛鳥歴史公園事務所、平城宮跡管理センター、奈良県、平城宮跡再生プロジェクト（県の指定管理者）と定期的に打ち合わせを行い、平城宮跡内での事業、イベントに関する情報を収集し、それを解説ボランティアへ提供することで来訪者に平城宮跡の情報発信を行った。

年度計画評価	A

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、新制度のもとで活動を開始した解説ボランティアの活動を確認し、改善等の意見を随時取り入れ検討するための平城宮跡解説ボランティア連絡会議、及び研究部と事務部が一体となって組織した平城宮跡解説ボランティア懇談会を継続的に開催したこと、また、毎朝開催している朝礼等において解説ボランティアからの意見を取り入れること等により、研究所におけるボランティアの情報発信内容等が効果的に進んでいくようになった。
②独創性においては、解説ボランティアの資質向上のため、平城宮跡における当研究所の最新の調査研究成果を踏まえた勉強会、発掘調査現地説明会、マナーや展示の研修に加え、解説案内に即した実地研修を企画実施した。③発展性においては、新制度の下、勉強会、研修を実施するとともに班長出席による連絡会議を毎月実施し、ボランティアからの意見を随時取り入れるようにすることで、活動の活性化や運用改善が進められた。④継続性においては、新制度による活動が順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 （参考値） ・ボランティア登録人数：158 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：87,546 人 ・解説活動日数：302 日	定量評価 —

中期計画評価	A
中期計画記載事項	宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。
評定理由及び今後の見通し	平城宮跡解説ボランティアについては、30 年 1 月から新たなボランティア制度のもと、定期的な勉強会、展示研修等を通じて、ボランティアの育成を行い、資質の向上に努めた。また、連絡会議の場を通じて、ボランティアの意見等を取り入れつつ、円滑な活動を実施している。今後も本制度を精査していき、更に効率的、効果的な運用になるよう努めていきたい。